

神と人について

まず、詩編 8 編 4 節から 10 節で神の創造のダイナミックさを味わいましょう。

「あなたの天を、あなたの指の業(わざ)を／わたしは仰(あお)ぎます。／月も星もあなたが配置なされたもの。／そのあなたが御心(みこころ)に留(と)めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。／人の子は何ものなのでしょう。／あなたが顧(かえり)みてくださるとは。／神に僅(わず)かに劣(おと)るものとして人を造(つく)り／なお、栄光と威光(いこう)を冠(かんむり)としていだけせ／御手(みて)によって造(つく)られたものをすべて治(おさ)めるように／その足もとに置かれました。／羊も牛も、野の獣(けもの)も／空の鳥、海の魚(うお)、海路(うみじ)を渡るものも。主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名(みな)は、いかに力強(ちからづよ)く／全地(ぜんち)に満(み)ちていることでしょう。」

詩編の記者は、神様が、全地を造り、人を造られたことをほめたたえました。イスラエルの民たちに長きにわたって伝えられていた神様の創造の御業を感動と感謝をもって書き記(しる)しています。このような神様の創造の御業を、わたしたちは、どのくらいの感動をもって受け止められているのでしょうか。

神様は、すべてのものをよいものとしてお造りになりました。人といわれる人間もすべての造られたものの最高のものとして造られました。神様にかたどって、神様に似せて造られたのです。そして、人は神様が造られたすべてのものを治めるように命じられたのです。ところが、人はサタンの誘惑(ゆうわく)に負けて神様との約束をやぶってしまい、悲惨でみじめな状態になってしまいました(罪の状態)。神様との平和の関係が、敵対関係となってしまったのです。敵であれば、すぐ排除されてもおかしくはありませんでしたが、神様の愛と忍耐と憐(あわ)れみによって楽園からの追放という破格(はかく)の取り扱いとなりました(神との約束をやぶると、「きっと死ぬ」と言われていたので)。

楽園追放というあわただしいなかであっても、神様は人を決して見捨てられませんでした。「お前[サタン]と女、お前の子孫と女の子孫の間に／敵意を置く。／彼はお前の頭を砕(くだ)き／お前は彼のかかとを砕く。」(創世記 3 章 15 節)との御言葉にあるとおり、創世記の時代からはるかに時代がくだって、イエス様の十字架と復活によって神と人との平和、人の救いが確実に来るとことが示されているのです。人が神様との約束をやぶったすぐあとに、この神様からの救いの約束(原福音・げんふくいん)がほんとうに厳しいかたちであっても、示されているということは、驚くべきことではないでしょうか。神様ならではの人への愛に満ちたご配慮というほかはありません。感謝しても感謝しきれないほどです。

天地創造のときから、世の終わりのときまで、神様は人とともにおられます。そして、今も人とともに働いておられます。どのような時も、この神様を、イエス様の十字架と復活をとおりて信じつつ歩んでゆきましょう。

(若月 学)